

九条幸家と源氏物語

——源氏切紙と幻の絵巻——

一 はじめに

中世末期の源氏学を支える存在として九条植通をあげることに異を唱える人はいないであろう。三条西実隆を外祖父に持つ植通は、三条西家の学問を吸収し、細川幽斎にその源氏学を託したことも知られる。しかし、植通の後裔である近世期の九条家は、摂家の中でも近衛家と違い文学面であまり目立った存在ではない。

今回、源氏物語・源氏学が九条家に息づいていることを表す資料を見いだしたので、その筆者・幸家（植通の孫）および九条家の源氏物語との関係を、周辺資料と併せて見ていくことにし、後半で現在話題になっている「幻の源氏物語絵巻」について言及したい。

二 幸家の源氏物語享受

返し伝受

九条植通（一五〇七―一五九四）は子を儲けなかったため、二条家から兼孝を迎えた。その兼孝の子が幸家（一五八六―一六六五）である。最初忠榮と名乗り、寛永八（一六三一）年に幸家と改名している（以下、本稿の地の文では寛永八年以前でも幸家を用いる）。こ

杉 本 まゆ子

の植通から幸家へ、実は源氏伝受が行われているのである。早く、井上宗雄氏が『中世歌壇史の研究 室町後期』に「（天正二十年―引用者注）十一月源氏三ヶ口決を将来忠榮に伝授すべく、賀茂社の森左京大夫に預け（弘文莊書目43）」と触れておられる。現在、「弘文莊待賈古書目」²⁾はDVD化されており、確かに「九条植通自筆預け状（天正廿年十一月廿七日／森左京大夫宛）」³⁾一幅が確認でき、「為可伝受右近衛中将忠榮預置者也」として、植通の法名である恵空の署名と宛書「神主森左京大夫殿」が記されている。つまり幸家への「返し伝受」をするよう、森左京大夫に預けたのである。「右近衛中将」とあるが幸家は天正二十（一五九二）年には七歳であり、源氏伝受をそのまま受けられる年齢ではなく、かつ八十歳を越えた植通がいつまでも待てる訳もない。第三者に預け、返し伝受を行わざるを得ない理由はここに明白である。

この返し伝受に相当する書状が宮内庁書陵部蔵・九条家旧蔵本「源氏物語三箇秘事切紙等」七点（九・一六四〇）の中にある。豎紙一通（三五・六×五三・一センチ）で文面は以下の通り。

源氏物語三ヶ秘決三光院殿被

奉授 東光院禪定殿下

御相伝之正説奉授

九条殿下訖被守此道法度

努々不可有漏脱者也

森左京大夫

元和五年三月十日 賀茂尚久（花押）

これによりいつ返し伝受が行われたかが明確になる。同七点の中には、

やうめいのすけなる人

楊名はた、名はかりといふ儀也

職掌もなく得分もなきをいへり

で始まり、「ねのこはいくつかまいらすへからん」「さふらひにとのゐもの、ふくろ」とする三箇条 つまり右伝受状で「三ヶ秘決」と呼ばれている伝受切紙（一通）もある。これは天正二年に三条西実澄（実枝）より植通へ送られた切紙の写しである。伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』⁴⁾では「源氏物語三箇大事切紙」として近世末期の写本によつて紹介されている。現時点でのこの切紙のもっとも筋の良いものは、「古今伝受資料」（書陵部蔵 五〇二・四二〇）中の細川幽斎から智仁親王に送られた一式に含まれたものである。これはそれには及ばないが、年次及び授受者が確定する源氏伝受切紙としては筋のよいものといえよう。

なお、賀茂尚久に関しては、「賀茂社家系図」⁵⁾にその名が見え、「神主／從四位下／慶松／左京大夫」「元和七年四月七日／卒年五十」とある。これにより元龜三（一五七二）年生まれとなり、天正二十一年には二十一歳の若年でありながら、忠栄の為に伝受を預けるにふさわしい人物であったことが推測できる（もっとも若くなければ幸

家が成人し伝受を受けるまで命が保たないが）。なお、同系図では尚久孫の維久の項に「号森」とあるが、それ以前から使用されていたことは『大日本史料』⁶⁾第一〇編之二十五冊 天正二年閏十一月十九日状に引用の馬場家文書等からも明白である。

源氏物語竟宴記

また前出「源氏物語三箇秘事切紙等」には幸家が「源氏物語竟宴記」⁷⁾に関して尋ねた勘返状（三一・八×四三・センチ 縦紙一通）もある。日次は書かれておらず、署名は「忠栄」となっている。「源氏物語竟宴記」は永禄三（一五六〇）年十一月、植通が三条西公条の源氏講釈を受け終わった竟宴の際に、土佐将監（光茂）が描いた紫式部像に植通と公条が記した讃（その折の和歌や連歌を含む場合もある）を指す。

幸家は讃中の語について、「令式部作源氏物語」「耽翫トハ心如何」「猶手之不廢」「元凱之癖ト云心如何」「不獲止ト云心ハ……」など、意味や読みを「禪閣」（父・兼孝）に問うもので、幸家の「源氏」享受のさまが窺える書状である。⁸⁾

兼孝は、『圖書寮叢刊 九条家文書』⁹⁾「所収三五（六）」「九条植通書状」により、植通から天正二（一五七四）年に所領等を譲られたことが確認される。その書状袖書には「源氏物語・伊勢物語・詠哥大概・百人一首等聞書預申候、二所にわけてをかれて給候へく候」とあり、源氏物語等が譲与されたことも知られる。そして同（五）「九条植通書状草案」には「至当家之秘説者、不殘奥義伝授申候了」（草案のためミセケチ等があり、訂正後の文章と思われる形で出した）と兼孝に奥義伝受をしたとある。しかしこれは九条家の本業で

ある摂家としての除目や即位などに関する秘説であつたであろうことが、後年幸家への返し伝受を計画したことによつても推測できよう。この時まで幸家は誕生していない。つまり文学に関しては祖通は兼孝に託す気が無かつたということになる。

兼孝に問うている時点で、この「源氏物語竟宴記」の勘返状は源氏伝受の内容に関わる秘匿性の高いものではなく一般的なレベルであり、かなり若年のものとみることができよう。これらの下積みがあつて、三箇秘事切紙を受けることができたのである。

幸家から道房へ

幸家の源氏伝受は息・道房へと受け継がれた。前出「三箇秘事切紙」は、相伝部分を

右源氏物語三ヶ秘決以相伝之正説令授右大将道房卿訖被守此道
法度努々不可有漏脱者也

寛永十二年正月十一日従一位（幸家花押）

と変え伝受された。包紙にも

此源氏物語三ヶ秘事者自／大殿（忠栄公／改幸家）令伝授之説
／于時寛永十二年正月十一日 右大将藤道房

被授東光院入道殿下三光院／前内府三ヶ秘事一帋加置之／尤

可秘藏者也

正保三年正月四日 左大臣（道房花押）

とある。『道房公記』（書陵部藏 九・五一一九）寛永十二年正月十一日条に

今日大殿源氏物語三ヶ秘事令伝余了（此伝受相続次第、三条西三光院■令伝東光院殿下、被殿下令伝賀茂神主——給『是大殿

其比幼年御仍仮令伝被者給大殿御成年之後可申上之由也』賀茂神主久令伝大殿以此説大殿、今日伝余給¹¹⁾

とある。道房はこれに続けてこの日「即位秘事伝受」「除目等之秘説記」を相続したことを記す。摂家として重要なそれらと同等、またはそれ以上のものと道房が捉えていることが読み取れる。

しかし道房は正保四（一六四七）年正月に薨ずる。三箇秘事伝受から十年後の三十九歳であつた。道房には男子が無く、鷹司家から養子を迎えた。兼晴である（正保四年当時七歳）。幸いなことに幸家が八十歳の長命を得たので、それまで後見人として十分な差配を行つたものと考えられる。

三 幻の源氏物語絵巻

矢野利長と九条家

近年、「幻の源氏物語絵巻」として話題になつてゐる絵巻がある。辻英子氏が「在外日本絵巻の研究と資料」¹²⁾で翻刻された石山寺藏『源氏物語絵巻』末摘花一卷、およびそのツレであるニューヨーク公立図書館スペンサーコレクションの末摘花二巻および帚木巻、『源氏物語と江戸文化』¹³⁾等で紹介されているパーク財団源氏物語絵巻断簡（賢木巻）そのツレであるベルギー本（個人蔵）を中心としたものである。絵巻であるのに短縮した絵詞ではなく、源氏物語本文をそのまま有する、特色ある絵巻である。なお、二〇〇八年五月二日（七月二日）、このツレである桐壺（三巻）が蓬左文庫にて公開され、現在徳川美術館で調査中とのことである。

これらの「絵巻」（以下、この「幻の源氏物語絵巻」と称されるものを「絵巻」と略す）のうち、早くから存在を知られていた石山

寺本・スベンサー本は、辻英子氏編『日本絵巻物抄―スベンサー・コレクション蔵』¹⁴⁾の写真によって見ることができ。末摘花巻には

右之端十六行者四辻中将季賢朝臣自筆

書繼已下賀茂郡主西池全助季通筆

とあり、帚木巻には

詞書 右馬頭源利長筆

とある。

また『源氏物語と江戸文化』収載の稲本万里子氏論文中の売立目錄によれば賢木巻には

此巻端十九行者 隨心院前大僧正榮嚴御自筆

書統者 右馬頭源利長筆

とあるという。そして、小嶋葉温子氏によって整理された「絵巻」の概要によれば、桐壺巻には、幸家と遍照院良淳が筆者として挙げられている。

榮嚴は幸家の子で道房の同母弟、隨心院門跡である。¹⁵⁾その後を書き継いでいる源利長については稲本氏はほとんど触れられていないが、『地下家伝』¹⁷⁾九条家諸大夫の項に載る矢野利長である。スベンサー本にあったとされる万治三年銘の「矢野俊長」¹⁸⁾にも合致する。

『地下家伝』によれば、利長は慶長十六（一六一）年生、延宝五（一六七）年没。寛永十一（一六三四）年六月に従五位下、右馬權助となり、この年に藤原から源に本姓を改め、慶安五（一六五二）年二月（この年九月に承応に改元）に右馬權頭になり、明暦元（一六五五）年六月二十五日に右馬頭となった。その後、寛文五（一六六五）年に美作守を兼ねたことが記されている。また承応頃の

九条家司の中では、官位・年齢から、筆頭であったことが確認される。つまり、榮嚴―利長は九条家という深い繋がりを有しているのである。

九条家での利長の役割を垣間見ることのできる資料がある。『後光明天皇崩御記（承応三年）』一卷（書陵部蔵 九・四九〇）は本奥書に「右一巻愚昧之至雖恥後覽任見聞之所及／令走禿筆了猶漏脱多端之偽可重尋／記者也／承応三（甲午）年／十二月上旬正五位右馬權頭源利長」とある。前関白である幸家（元和九年から三十年間、前関白・散位のまま）と、わずかに十四歳の当主兼晴に代わり、天皇崩御に際して見聞きしたことを記したものである。これが九条家に伝わっていることは利長が信用されていたことの証であろう。

また利長の自筆資料として「九条輔実元服次第」（書陵部蔵 二〇八・一〇四六）がある。奥書写真を論文末に掲示した。前出スベンサー本の帚木巻詞書写真と比較したいところであるが、「絵巻」は仮名書き、元服次第は漢字で書かれており、延宝四（一六七六）年と二十年ほど後、六十六歳の筆跡で、雰囲気はかなり異なる。しかし、悪筆ではなく、書写を任されるのに問題ない水準と言えよう。なお、帚木巻奥書「詞書 右馬頭源利長筆」は末摘花巻の季賢・季通筆の奥書と同筆であるので利長自筆とは考えがたく、自署との比較対象にはならない。

「絵巻」の成立

従来、「絵巻」の成立指標は、四辻季賢の官歴の「中将」である期間にあり、正保四（一六四七）年以降万治三（一六六〇）年までとするのが通説で、近年の田口榮一氏「末摘花」絵巻における物語

の絵画化―源氏絵場面選択の意識とその造形化の一考察¹⁹⁾」においてもそう記されていた。

なお、季通は「元禄六年八朔／卒年七十五」と「賀茂社家系図」にあるので、一六一九年（元和五）の生まれで、利長より八歳年少である。

四辻季賢の履歴を『公卿補任』で確認すると、明暦元年六月十四日に参議に任ぜられている（左近中将如元）。つまりこれ以降季賢は「宰相中将」「四辻宰相」など参議であることを示した呼び名になるのが通例になり、格下の「中将」のみの呼称になることはない。よって、季賢筆とする奥書からは明暦元年六月以前と考えるべきなのである。

しかしすでに利長の任右馬頭は明暦元（一六五五）年六月二十五日であることは確認している。その上、新聞報道によれば新出の桐壺巻には「明暦元年」の奥書があるとされる²⁰⁾。これによって制作年次の問題は一応の決着を見る訳であるが、四辻季賢の問題を少し考えてみたい。

現存の巻から少なくとも賢木巻まであったことが確認できるこの「絵巻」は注文主の楽しみの為に作られたものというよりはやはり贈答品として作られたと考えるべきであろう。贈答品であることを前提にすると、詞書筆者およびその人物の官位も贈答品の格を定めるものとなる。そのときに、四辻季賢の参議昇進を記さないことがあろうか――。明暦元年六月十四日以前に、この季賢が担当した未摘花巻は表装直前まで進んでいたことがわかるのである。

調整者（制作統括者）たる奥書筆者のもとに未摘花巻が届いて後、利長がおそらく一ヶ月は遅れて帚木巻や賢木巻を仕上げたことにな

る。桐壺巻奥書にあるという明暦元年は、まさしく他の巻の制作年をも示していることになる。

「絵巻」詞書筆者について

栄厳と矢野利長が担当した「絵巻」の賢木巻および帚木巻は、当然のこととして九条家の差配であろう。前半数行／一丁分程度を貴人が書き、それ以降をその家の家司層が書くというのは極めて自然で、数多の「藤原定家監督本」と同じ形態である。

稲本氏は前出論文で「当時の権力者によって大規模な源氏絵制作が企画された時、帚木巻と賢木巻を分担したのは九条家の当主九条幸家であり」とされるが、九条家に分担制作を命じる存在となれば天皇・法皇であろう。同書の鼎談では「全体を企画したのは後水尾院か東福門院か、そのあたりを想定しています²¹⁾」とも稲本氏は述べておられる。果たしてそうであろうか。

たとえば、勅命を受けて書写したと考えられる『源氏物語』で筆者目録が残っているものを挙げると、次のようになる。

帚木	内大臣（道前公）	行幸	石井前中納言
夕顔	万里小路前大納言	蓬生	東宮大夫
若紫	石山前宰相	関屋	庭田前大納言
末摘花	豊岡三位	絵合	油小路大納言
葵	四辻大納言	薄雲	風早前宰相
柳	日野中納言	玉鬘	源大納言
須磨	侍従三位	胡蝶	石山少将
明石	新宰相中将	常夏	前平中納言
霽標	櫛笥中納言	野分	権大納言

楨柱	新大納言	橋姫	頭弁
藤裏葉	宰相中将	椎本	久世少将
若菜下	東宮権大夫	総角	新侍従三位
横笛	石野宰相	東屋	七条少将
御法	中院少将	浮舟	中務大輔
幻	治部卿	蜻蛉	園池少将
紅梅	左大弁宰相	手習	権中納言
竹河	大原前中納言	夢浮橋	帥宮

当該目録には、筆者欄が空白の巻名も多く存するが、紙幅の都合で省いた。また帚木巻「内大臣〈道前公〉」のように、名が小字で記されているが、これも道前を除き省いた。この目録（懷紙を仮綴したもの）が付された源氏物語（書陵部蔵 五五四・二三）四十帖は、列帖装綴綴の状態であり、御所に伝来した本である。『柳原紀光日記』（書陵部蔵 柳・一二〇三）明和六（一七六九）年四月十六日条には「源氏物語〈橋姫巻〉可書進旨被仰下、即今日所立筆也」とあり、この（時頭弁であった）紀光に、禁裏（後桜町天皇）より仰せがあり書写することになったことが確認できる。

これらはそれぞれ一帖一名で書かれており、家司層の名が登場することはない。もちろん、目的によっても代わってくるであろうが、勅命であれば、このように内大臣や親王が書くのが当然である。残念ながら桐壺巻の筆者は知られないが、夢浮橋が帥宮（閑院宮典仁親王）で、当時親王方の中ではもっとも座次の高い人物である。寄台書に多い巻頭巻末は高位の者が記す形式に則ったものと思われる。帚木が内大臣となればそれ以上の人物が想定されよう。

「絵巻」では桐壺巻詞書を幸家が記したが、つまりは筆者の中で

の最高位が幸家であることの証明になろう。

しかし桐壺巻以外（本来は夢浮橋巻であろうが、現存の絵巻が前半しかないので不明）については、中将でしかない四辻季賢が十六行書いて西池季通に託す水準の巻があるのだから、（もちろん、現存が確認されない他の巻に他摂家の関与があれば別であるが）勅命にしては身分的な偏りが感じられる。現時点では九条家が制作主であったと考えるのが自然であろう。二条康道が関与していた場合は、本論文末の系図の通り、幸家の子で二条家を継いだ人物であるので、自家の扱いをしたのであろうと思われる。

また四辻季賢といういわば九条家の外の人間が写した巻が早く、身分の低い利長が書いた巻が遅いということは、九条家で多くの巻を書写した証拠になろう。前出書陵部本源氏物語が後桜町天皇の命によって写されたものであるのに、完成しなかったことから考えても、公家に源氏物語本文を、それも絵巻の為の豪華な料紙に書かせる作業は難航したのであろう。しかし贈答品は贈る機を外すことはできない。よって家司の利長が多くの巻を書くことになった、とするのはそれほど無理な推論ではあるまい。

九条家は兼晴の代になったとはいえ、まだ若年ゆえ（明暦元年に十五歳・従二位権大納言）、絵巻制作の実質的下命者は幸家であったことは想像に難くない。特に五十嵐公一氏「九条幸家と京狩野家」²²によって指摘のある京狩野家と幸家の繋がりを考えると、幸家（九条家）が狩野派絵師に描かせたとするのが良さそうである。

四 幸家と「絵巻」

制作の理由

このような「絵巻」を九条幸家が明暦元年ごろに制作した理由は何であろうか。

散位前閑白となつて三十年近く、直接的な政治関与ができない幸家の当時の事跡のうち、注目されるのは承応二（一六五三）年の記事である。

八月十二日御転任の大礼行はる。（中略）次に花町式部卿良仁親王、九条太閤幸家公、同中納言兼晴卿をのをの拝謁せられ太刀目録を献ぜらる（徳川実紀²³）

禁裏が良仁親王（花町宮・後の後西天皇）・九条幸家・同兼晴を、慶安四（一六五二）年に將軍となつた家綱の代継を慶賀するため差し遣わしたのである。兼晴と家綱は同い年、このとき十三歳である。その翌年、後光明天皇の崩御により、後西天皇が即位した。周知のごとく、後光明天皇崩後、出家していない後水尾天皇の皇子は、良仁親王（後西天皇）と生まれたばかりの識仁親王（後の靈元天皇）だけで、靈元天皇即位までの中継ぎとして擁立されたのが後西天皇である。

後西天皇と幸家の関係はこの時にとどまらない。明暦元年五月十四日、天皇の女御である明子女王が幸家第で皇子（後の穩仁親王）を出産している（統史愚抄²⁴）。明子女王は高松宮好仁親王女で、後西天皇即位により高松宮は空いてしまい、確かに女御の出産には向かない状況である。そこでなぜ幸家が登場するのか。系図を見ると、道房正室の松平忠直女のきょうだいが明子女王の母であることに気

づく。武家方との繋がりで、幸家と後西天皇は近しい関係であつたことになる。

道房室以前に、幸家と徳川家の繋がりは深い。幸家室の完子（豊臣秀勝女）は、浅井長政女お江戸を母に持つ。お江戸は秀勝没後、徳川秀忠御台所となり、東福門院（和子、後水尾天皇中宮）らを儲けた。そしてそのうちの一人（勝姫）の子が道房室となるのである。摂家としては、続けて正室を武家から迎えている点が目に立つ。なお同時代の近衛尚嗣（一六二二―一六五三）は後水尾天皇の内親王を正室としており、違ひは明白である。

この下向を機に、幕府との関係を深めようと試みた結果が「絵巻」となつたとは考えられないか。そうすれば、稲本氏が注目された「四葉葵文の直衣を着た貴族」の絵にしても（幸家の趣向か、絵師の趣向かはともかく）平仄が合おう。

より積極的に考えれば、道房の遣した娘たちを徳川家に、と目論んだのかも知れない。先代將軍家光の正室は鷹司孝子（本理院、一六〇二―一六七四）であり、摂家の女子が御台所になつた先例があるためである（顯子女王の入興は明暦三年であるが、その何年前に婚約を約定したかは不明）。

御台所は妄想としても、『徳川実紀』明暦元年十二月晦日条に

九条故摂政道房公の息女をもて、高田御方養女にせられ、松平越後守光長の子下野守綱賢にめあはすべくむね仰出さる。

と、道房娘高田御方（勝姫）の養女となり、越前松平家・綱賢へ入興の運びとなつたことが書かれている。道房の娘は、系図では兼晴室・松平綱賢室・東本願寺光晴室・浅野綱晟室・同継室となつた五名が確認できる。夫たちが寛永十二（綱賢）十八年（兼晴）生ま

れであるので、相応の年齢であつたと思われる。この婚礼のための祝品であつたか、(より上位の婚姻関係を目指しての)交渉のための品であつたかは不明であるが、九条家から武家に贈られたものである可能性は高いと言えよう。

絵巻の題材

ではなぜ「絵巻」は源氏物語なのだろうか。もちろん、もつとも世に知られた文学作品であり、絢爛たる絵巻にもつとも相応しく題材として申し分ないのは当然である。

しかし、それだけではない。源氏絵を題材にした調度はいくらでもあるが、京狩野派と幸家の関係で言えば、すでにこの「絵巻」より先に興味深い品がある。現在は東京国立博物館に蔵されている狩野山楽画「車争い図屏風」である。これは九条家旧藏品であり、川本桂子氏は本屏風(もとは襖絵)を慶長九年の幸家と完子の婚礼に伴う作成と考えられている。また川本氏は、本屏風の画中に三葉葵紋の武家の姿があることを指摘している。先の四葉葵の直衣と通ずるものがあるように思われる。

そして源氏本文をすべて書き記した「絵巻」の特殊性を考えると、優良なテクストを求める人物への贈り物と考えることが出来はしまいか。そのときに、本論前半で述べたごとく、幸家が「源氏伝受」を受けた存在、「植通の孫」であることが生きてくると思われる。

源氏物語伝受に関して言えば、後水尾天皇の源氏講釈が『隔蓑記』万治二(一六五九)年七月十八日条「今日者源氏物語之御講尺故予急令退出也」²⁶⁵あたりから始まり、翌年烏丸資慶・中院通茂に源氏切紙伝受が行われるので、それ以前には限られた人のためのものだった

と考えて良からう。いずれにせよ、幕府側でそのような伝受に触れる機会のある人物はおそらくいまい。源氏学の泰斗・植通の孫の「ブランド力」も相俟って源氏物語を選択したと考えられるのである。

五 おわりに

以上、前半は九条幸家の源氏物語伝受について「伝受状」を中心に論じてきた。九条家の文学事跡は目立たないものであるが、幸家から道房にと源氏伝受が行われ、家の学問として受け継がれていたことがわかる資料を掲示した。

後半は、「幻の絵巻」詞書筆者の一人、九条家家司源(矢野)利長について考察し、併せて成立年次を考え、桐壺巻にあるとされる奥書の補強をした。また制作理由としては、將軍代替による幸家・兼晴の江戸下向を期とした幕府方への接近手段と想定した。また後西天皇とともに武家方に近い関係であることを指摘し、血縁関係の強化を視野に入れた贈り物であつたと推測した。

そして終わりに幸家は絵巻をなぜ源氏物語にしたのか、前半の伝受に則して考えた。

幸家差配の「絵巻」と杉原盛安の関与、「絵巻」本文と九条家の所持していた源氏物語本文についてなど問題は山積しているがこれは今後の課題としたい。

注(1) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町後期』改訂新版(明治書院一九八七年)。

(2) 反町茂雄氏編『弘文莊待賈古書目』WindowsXP版(八木書店 二〇

〇二年。

- (3) 〈へ〉は小字・割書を示し、『』は割書の中の割書を示す。以下同じ。
- (4) 伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版 二〇〇一年）。
- (5) 神道大系編纂会編『神道大系 神社編八 賀茂』（神道大系編纂会 一九八四年）。
- (6) 東京大学史料編纂所『大日本史料』第二〇編之二五（東京大学出版会 二〇〇六年）。
- (7) 群書類従 十七輯 三一九（統群書類従完成会 一九七八年）。
- (8) なお、書陵部には九条本が多く入ったが、この土佐光茂画紫式部像は確認できない。
- (9) 宮内庁書陵部編『九条家文書』一（一九七一年）。
- (10) なお、この二所は東福寺普門寺と三条西実澄亭であることが同（7）九条通記録覚書によってわかる。
- (11) ■部分は墨減。
- (12) 辻英子氏『在外日本絵巻の研究と資料』正編（笠間書院 一九九九年）。
- (13) 小嶋菜温子・小峯和明・渡辺憲司氏編『源氏物語と江戸文化―可視化される雅俗―』（森話社 二〇〇八年）。
- (14) 辻英子氏編『日本絵巻物抄―スペンサー・コレクション蔵―』（笠間書院 二〇〇二年）。
- (15) 小嶋菜温子氏『幻の「源氏物語絵巻」覚え書き―室町期・近世初期の「源氏物語」享受史から』（立教大学大学院 日本文学論叢『八 二〇〇八年八月）。
- (16) 栄蔵の略歴、文化活動については海野圭介氏「随心院門跡伝来の歌書類と九条家」（『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』大阪大学大学院文学研究科 二〇〇五年三月）に詳しいので、ここでは省筆する。

- (17) 正宗敦夫編纂校訂『地下家傳』覆刻版（現代思潮社 一九七八年）。
- (18) 反町茂雄氏編『スペンサーコレクション蔵日本絵入り本および絵本目録』増訂再版（弘文荘 一九七八年）による。
- (19) 田口榮一氏「『未摘花』絵巻における物語の絵画化―源氏絵場面選択の意識とその造形化の一考察（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂 二〇〇〇年十一月）。
- (20) 新聞報道による。注(15)参照。なお、二〇〇九年一月現在、<http://opt-rinmunchico.jp/topics/20080521-4.html>にてインターネット上でも確認できる。
- (21) 注(13)鼎談「幻の「源氏物語絵巻」を求めて」。
- (22) 五十嵐公一氏「九条幸家と京狩野家」（兵庫県立歴史博物館『塵界』一七 二〇〇六年三月）。
- (23) 黒板勝美氏・国史大系編修会編『新訂増補国史大系 徳川実紀』第四編（吉川弘文館 一九六五年）。
- (24) 黒板勝美氏・国史大系編修会編『新訂増補国史大系 続史愚抄』後編（吉川弘文館 一九六六年）。
- (25) 川本桂子氏「九条家伝来の車争い図をめぐる」（山根有三先生古稀記念会編『日本絵画史の研究』吉川弘文館 一九八九年）。
- (26) 赤松俊秀氏校註編『隔蓑記』復刻（思文閣出版 一九九七年）。
- 附記 小嶋菜温子氏にはNHKハイビジョン特集「源氏物語 一千年の旅」二五〇〇枚の源氏絵の謎」など、御厚情を賜りました。御礼申し上げます。

【矢野利長筆跡】

此乃升女延宝三年十二月十日
九条尚經所書
利長筆跡
延宝三年二月十日

【系図】

